

社会的に孤立し 困窮状態にある少女を支える活動

私は家庭や学校に居場所を失くした高校生を「難民高校生」と呼び、孤立・困窮状態にある少女を支える活動を行っています。夜の街を巡回し、終電前後に家に帰らずにいる少女たちへの声掛けや相談事業。十分に食事をとることができていなかったり、ネグレクトを受けていたりする少女への食事提供。虐待を受けていたり、DV、強姦、児童買春や人身取引などで性暴力の被害に遭ったりした少女たちが夜間に駆け込める一時シエルトの開設、自助グループの運営。少女を取り巻く実態を大人向けに伝える啓発活動や夜の街歩きスタディーツアーなどを開催しています。

相談は全国から寄せられ、北海道から沖縄まで、少女たちと出会い関わっています。昨年度は1年間で84名の少女と出会い、人身取引や性的搾取の被害に遭った少女からの相談が多くありました。JK（女子高校生）ビジネスに関わる少女が58名、個人売

春をしている少女が23名、幹旋者の下で管理売春させられている少女17名とも出会いました（重複あり）。中には、知的障害、発達障害の少女が狙われ搾取されているケースもあり、被害に遭った少女が自傷行為や自殺未遂を行うケースも後を絶ちません。

「難民高校生」だった高校時代

10年前、私も高校生だった頃、家庭や学校に居場所がないと感じ、月に25日、街を徘徊する生活を送っていました。ファストフードや漫画喫茶、居酒屋、カラオケの他、ビルの屋上で一夜を明かしたこともありました。雑居ビルの屋上に段ボールを敷いて生活するホームレス状態の男子高生の友人もいました。

渋谷や新宿などの大きな繁華街で少年補導が厳しくなる中、虐待などを背景に家に帰れない子どもたちは、住宅街や郊外に隠



仁藤 夢乃

女子高生サポートセンター Colabo代表

【にとう ゆめの】1989年生まれ。中学生の頃から街を彷徨う生活を送り、路上に段ボールを敷いて一夜を明かしたこともある。高校中退後、明治学院大学社会学部に進学。友人らが路上を彷徨う生活から抜け出せずにいることから高校生に目を向けた活動を始める。「居場所のない高校生」や「搾取の対象になりやすい青少年」の問題を発信するとともに、日常的な関わりを通して少女の支援を行っている。2015年より第30期東京都青少年問題協議会委員を務める。著書は『難民高校生—絶望社会を生き抜く「私たち」のリアル』（英治出版、2013. 3）、『女子高生の裏社会—「関係性の貧困」に生きる少女たち』（光文社新、2014.8）。

れるようにして朝を待っていました。街には、全国各地から居場所をなくした中高生が集まっていました。「大人はわかってくれない」と思っていました。それは、「向き合ってくれる人がいない」という心の叫びだったと今になって思います。

今も、同じような状況にある少年少女と出会い、関わっています。そうした少年少女に路上やネット上で声を掛けるのは、手を差し伸べる大人ではなく、違法の仕事を紹介するスカウトや、買春者ばかりです。

少女の場合は、買春者や、JKビジネスや違法の風俗店や児童買春の幹旋業者。少年の場合は振り込め詐欺の受け子や、違法の建築作業や除染作業に幹旋する業者が声を掛けています。孤立した子どもをリクルーティングする組織があり、中には、知的障害のある少女を専門にしている者もいます。そうした声掛けにより、困っている少年少女が公的支援につながる前に、危険

に取り込まれている現状があります。渋谷や新宿などの各繁華街では、毎晩100人ほどのスカウトが街に立ち、少年少女に声を掛けています。

日本における人身取引

「JKビジネス」の実態は

現在、社会問題となっている女子高生の未熟さを売りにした「JKビジネス」は、児童買春の温床となっており、ここで働く



うちに性暴力を受け、心身ともに傷を負った少女と出会っています。

東京・秋葉原では、2メートル間隔で少女が立ち、客引きをしています。「お散歩いきませんか?」「ご飯食べませんか?」と声を掛けています。私はここで働く少女と80名以上関わっていますが、そのすべての少女が、客引き中、買春や性交渉を持ちかけられています。「高校生もたくさん働いている、危なくない」と誘われ、危険を知らずに働き、客からの性被害に遭った少女からの相談も多くあります。

警視庁の発表によると2013年、JKビジネスは東京だけで200店舗存在し、1年間で101人の少女が保護、補導、逮捕されています。米国国務省が2014年に発表した人身取引報告書では、日本で家出した10代少女が買春の被害を受けていることや、「JKお散歩」が児童買春の温床になっていることが指摘されていますが、日本政府はこれらに対する取り組みをほとんど行っていないのが現状です。

JKビジネスには、様々な業態があります。女子高生を撮影する「JK撮影会」、少女との会話を売りにした「JKコミュニケーション」「JKトーク」、ゲームができる「JKプレイルーム」、少女による占いや、カウンセリング店などが、風営法にひっかからないグレーゾーンで営業し、摘発のいたちでここに存在しています。

経営者たちは、組織的に、巧みに少女を

勧誘しており、ブログやツイッター、ラインなどのSNSに求人掲載し、街でスカウト行為を行っています。「観光案内のアルバイト」という求人を見て面接に行ったら「男性とデートをする仕事だ」と言われ、学生証のコピーをとられてしまったので断れずに当日働くと、カラオケや漫画喫茶で客から性行為を強要された少女。街で「スカウト」を名乗る人物に声を掛けられ、「仕事を紹介する」と言われたり、「大手芸能事務所が運営するカフェ」や「撮影スタジオ」であるとだまされたりし、ポルノ動画を撮影された被害もあります。中には、女子高生だけでなく、小中学生が被害に遭うケースもありました。

JKビジネスは、児童買春や性的搾取に取り込むための教育機関・期間となっています。愛知県では全国で唯一、JKビジネスの全面禁止条例を施行しています。経営者への罰則が設けられたことは有意義ですが、買う側への罰則は何もないのが現状です。JKビジネスの需要と供給は、売りたい大人と買いたい大人間で成り立っています。需要を断つためには、買う側の規制が不可欠です。

海外では、女子高生をブランド化し、性的に価値の高いものとする日本の文化が指摘されています。一人一人の意識から、子どもへの性的搾取や商品化を許さない社会をつくり、背景にある孤立や困窮を自己責任論で語らず、社会全体の問題として捉え

直すことが必要です。

「普通の子」まで取り込む手口

J Kビジネスで働く少女たちは、3つの層に分けられると考えています。①貧困層 ②不安定層 ③生活安定層です。①経済的困窮家庭の少女や、②家庭や学校に何らかの困難を抱えている少女のみならず、③両親との仲も学校での成績もよく、将来の夢もあつて受験を控えているような「普通の」女子高生が、リフレ（個室マッサージ）やお散歩の現場に入り込んできています。

そうした少女たちは、ライン、カカオトーク、ツイッター、ツイキャス、ブログやゲームのメッセージ機能などを通して求人情報を得たり、仕事に誘われたりしています。業者は可愛いHPを作っています。あるサイトには、J Kビジネス店の求人が東京だけで数百店掲載されています。私は、このサイトを経由して店にアクセスし、被害に遭った少女と多数出会っています。

J Kビジネスの大人たちは、少女たちに馴染みあるツールや文化の中に入り、少女を誘い込んでいます。敷居を下げて、間口を広げ、特別な事情を抱える少女以外にも取り込んでいます。

J Kビジネスが困難を抱えていない少女にまで一般化していくと、貧困状態にある、コミュニケーションが苦手、自信がない、障害をもっている等、困窮度が高い少女は

J Kビジネスでは稼げなくなります。その結果、売春宿に囲われたり、より痛い、臭い、汚いところで性奴隷のように働かされます。私はこのように人間以下の扱いを受けた少女とも出会っています。そうして危険に取り込まれた少女少女たちは、「非行少年」と呼ばれ、取り締まりの対象となりますが、背景には、虐待や孤立、貧困を抱えているケースがほとんどです。

父親からの性的虐待を背景に、「家についてお父さんにヤラレルよりまし」と、街に出て宿泊場所を求め、売春行為を繰り返している少女を警察が補導した際には、親に連絡し、家に帰されるだけで背景への介入は行われませんでした。少女は警官から売春理由を聞かれることはなく、「簡単に稼げるからって、こんなことしていいと思ってるのか」と大きな声で怒られただけでした。私は「ケア付きの補導」が必要だと考えています。自ら「助けて」と言えず、支援につながれずに危険に足を踏み入れた少女が警察に補導されたとき、それをきっかけに背景への介入や、必要なケアにつながるような支援策が必要です。

児童福祉から取りこぼされる子どもたち

現在、私たちは児童相談所や警察、医療機関などへの同行支援も行っていますが、困難を抱えた少女たち、とりわけ性犯罪に

巻き込まれたり、性被害に遭ったりした少女が公的支援を受けることにとても高いハードルを感じています。

夜間巡回中、街で声を掛けた少女に「保護じゃないよね?」「児童相談所に連絡しないよね?」と、怯えた様子で言われたことが、何度もあります。少女たちの間では「保護」が恐れるべきものとなっていることも少なくありません。

先日、日本テレビの「news every」で、新宿の一時保護所の実態が報道されましたが、私たちも出会う少年少女たち20人以上から、全国の児童相談所や一時保護所で、生活を強制管理され、人権をないがしろにされる扱いを受けたと聞いています。児童相談所の対応が、困難を抱える青少年の実態と合っていないことも、日々感じています。

例えば、児童相談所の開所時間は多くが平日の8時30分～17時30分です。その時間は学校があるため、安全に過ごしている子も多いのですが、夜間や土日祝日、親が家にいる時間帯に困ったとき、駆け込める場はありません。金曜日の16時頃、虐待を受け自殺未遂を繰り返す少女が児童相談所に相談をしたら、「もうすぐ閉館だし土日は休みなので、月曜日にまた電話をしてください」と言われたこともあります。夜間や休日にも対応できる仕組みが必要です。

保護者からの虐待を理由に家出し、売春をしながら生き延びていた15歳の少女の相談に児童相談所に行っても「売春や家出を



しているなら施設では保護できない」「精神的に不安定なら病院へ」とたらいまわしにされ、以前入院していた精神科医でも「この子だけは勘弁してくれ」と受け入れ拒否をされたこともあります。

児童相談所が、虐待家庭の十分な調査なしに、売春する少女に「性依存症の自助グループ」を紹介したこともあります。少

女は性依存症だから売春しているのではなく、虐待から逃れるため、夜間泊まれる場所を探して生活していたのに、です。その少女はその後、囲われていた売春宿に戻ってしまいました。そして、心身ともに健康状態はボロボロになり、15歳にして卵巣を1つ摘出することになってしまいました。虐待や性被害に遭っている子どもたちが、自ら助けを求めて声を上げることはとても難しいのが現状です。その多くが、これまで学校のカウンセラーや行政の教育相談室などで「誰にも言わない」約束で相談したにも関わらず、親や教員にその内容を知らされてしまうなどの裏切りや、「お前は汚い」と言われる等の経験をしています。そのため、大人や公的支援を信頼できずにいます。児童相談所や警察、その他の機関などに相談する際、子どもたちには「自ら足を運び、大人がわかるように被害の詳細を整然と伝える」ことが求められるため、そこうまく話ができずに、何の対応もされないこともあります。

一方で、スカウト組織や買春者は、少女に必要な「衣食住十関係性」を、支援より先に与えています。帰るところがないのなら「寮」を、夜間に徘徊していれば補導され家に帰されてしまうからと「宿泊場所」を提供し、時に食事を与え、学習支援をしている店もあります。彼らは少女たちを「担い手」として捉え、仕事を与えて取り込むやり方を行っています。私たちは、

少年非行を単なる非行として捉えるのではなく、その背景にある困難や、支援の不足、危険に取り込む大人の巧みさを考えなければならぬと思っています。

支援の側には、少女をJKビジネスに誘い込むスカウトのような存在が不足しています。困難を抱える少年少女が危険に取り込まれる前に、発見し、繋がり、伴走して子どもを支える仕組みが必要です。

少女は売春に気軽に足を踏み入れているのか

みなさんは、少女売春について、どう思いますか？ 少女の貞操感、個人の問題とし、自己責任論で語りたがる日本人が多くいることを、活動の中で感じています。

児童買春で行われているセックスは、恋人や夫婦間で行われるものとはほど遠いものです。痛い、汚い、臭い。中高生、中には13歳以下の少女が性器に野菜を入れられたり、裸で公園を歩かされたり、手足を拘束され目隠しされて顔に排泄物をかけられたり、強姦されたり、性器を裂かれたり、その様子を動画で撮影されたりしています。これは性暴力であり、売春経験のある少女たちの語りは、性暴力被害者の語りと同重なることが多くあります。

彼女たちは、精神的にも肉体的にも傷つけられ、自尊心を失っている状態にあります。そんなところに、「気軽に」足を踏み



入りたいと思うでしょうか。中学1、2年生が「SNSで売春を募集しよう!」と思いつくでしょうか?

彼女たちは、ほとんどの場合、ネットや街で出会った大人に売春のやり方を教えられています。その多くが、家庭や学校で孤立し、問題を抱えているものの、公的支援からもれてきている中高生たちです。経済的に困窮し、「生理用品が買えない、今日食べる物がない」と話す少女、「給食費や修学旅行費を支払うため」に売春に足を踏み入れたと話す中高生もいます。

児童買春問題は「需要と供給があるからなくならない」と言われます。需要と供給はどこにあるのか、みなさんに考えていただきたいのです。JKビジネスでも、

SNSを使った管理売春でも、一見少女自らが男性を誘っているように見えるかもしれませんが、実際、少女の裏には、彼女たちを管理する大人が存在します。需要と供給は、「売りたい大人」と「買いたい大人」間で成り立つものであり、そこに、未熟な少女、とくに、孤立・困窮した少女たちが「商品化」されているのが実態です。

これは、大人の問題です。しかし、「SNSを通して少女が売春をしやすくなった」と問題視する人がいても、大人にとって「気軽に買春できる」状況であることを問題視する声は少ないのが現状です。

メディアでも、児童買春問題は少女の売春問題、少年非行問題として取り上げられ続けています。先日、16歳の少女が売春防止法違反で異例の逮捕された際にも「売春で得た金を、洋服や映画代に使っていた」と様々なメディアが報道しました。確かに、服を買ったり映画を観たりしていたのだと思います。しかし、少女は長い間家に帰らずにいたと言います。きつと、売春で得たお金を漫画喫茶でのシャワー代や食費、生活費にも充てていたはずだ。「シャワー代や生活費に使っていた」と報道するだけでも大分印象が変わるのに、と思います。この少女の場合は「家に帰らない」親の監督に服さない」として警察は逮捕に至ったそうです。きつと彼女には、家に帰らたくない、帰れない事情があったのだと私は想像します。子どもたちが売春しなくても生きてい

ける、売春させない環境、関係性を、大人たちがつくつていかなければなりません。

私たちは、すべての少女が「衣食住」と「関係性」を持ち、困難を抱える少女が暴力を受けたり、搾取に行き着かなくてよい社会を目指し、活動をしています。困っている人の一番の困りごとは、「助けて」と言えないこと。「あなたはどうしたい?」と問われても、それがわからないことです。混乱した生活の中、落ち着いて考えられる環境や一緒に状況を整理してくれる人との信頼関係や体験があつて初めて自分の状況を見つめ、向き合うことができます。

私たちは、少女が夜間に自ら駆け込めるシェルターを開設し、食卓を囲む時間や体験を共有し、何気ない日常を積み重ねることで互いを知り、困ったときに頼れる信頼関係を築いています。半年以上密に関わって初めて、性的虐待の被害に遭っていることを話してくれる少女もいます。

ある少女が、スタッフと皿洗いをしているときに言いました。「こんなことがお母さんのできる家だったらいいな」。また別の少女は、一緒に作ったお好み焼きを食べて言いました。「こんなちゃんとした手料理は7年ぶり」と。

ほとんどの場合、抱える問題はすぐに解決できることはありません。だからこそ長い目で付き合ひ、喜びや苦しみを分かち合ひ、泣き、笑い、怒り、共に歩める伴走者でありたいと考えています。